教育コラム「愛のかけはし」：２５７号

令和５年　４月
江差町教育委員会
学校教育課

『 ＹＥＬＬ **1.5** 』

「全国的に教員が不足している」との報道を時々見聞きします。学校によっては、必要な人員が整わず欠員が生じ、ある小学校では、本来はフリーの教務主任の先生が学級担任も兼務しているそうです（＊教頭先生が、学級担任を兼ねる場合もあるそうです）。これは、由々しき事態で、学校の機能が一部麻痺していると言っても過言ではありませんし、業務が上乗せされる状態になり、その職員には過度な負担を強いることになります。当町では、必要な数の教員が配置され新学期をスタートできました。有り難いことです。

教員不足の要因の一つに、教員採用試験の受験者の減少が挙げられています。つまり教職を志す方が減っているようなのです。その理由に、ここ数年、社会的に取り上げられている、教員の長時間労働に加え、その中身が実に過酷なものになっているという状況があるからだとのことです。

「そんなにつらい仕事なら、他の仕事を選択しよう」という考えに異議はありません。でも、一方で、そのような情報が流布されている中で、教職を目指す方たちがいるのも事実です。ではなぜ、彼らは、学校の先生になろうとしているのでしょうか。

おそらくは、小学校、中学校、高校のどこかで、教師との良い出会いがあり、教師という仕事に憧れを抱くようになったのではと想像します。（＊私の場合は、前述に加えて学校を舞台にしたドラマの最盛期で、それを観て影響を受けたことも要因にはなっています）

他には、教育実習で、教職のやりがいや喜びを味わったからだと想像しています。そのやりがいや喜びは、学校現場の厳しい状況を凌駕するものがあるのだろうと察します。
子どもと共に成長できた。子どもと共に何かを成し遂げた等々。（＊一方で、教育実習を機に、将来の職業の選択肢から教職を除外される方もいますが）

企業は、利益を追求します。厳しいノルマもあります。学校現場にも、達成目標はありますが、民間企業のそれとは質が違います。その点では、ある意味曖昧さがありますが、人間と人間の心のふれあいをとおして、時に大きな感動が生まれ、そこに立ち会うことができるのが学校の先生なのです。このことにやりがいや生きがい、働きがいを見い出せたもしくは何となくでも感じている人たちが教職を志望するのだと思っています。

さて、以下は、教職を志望し、めでたく採用され、この４月から教職人生をスタートさせた皆さんへのエールです。なお、以下の文章は平成 30 年 4 月発行：第 198 号『ＹＥＬＬ』の再掲です。

この４月も、全国の公立学校において多くの新規採用者が教職生活をスタートさせました。教員を志して教員免許状を取得し、難関の教員採用試験を突破し、めでたくその職に就かれ、希望と意欲に満ちていることと思います。

一方で、生活環境が激変し、加えて教員の仕事の現実を目の当たりにし、「こんなはずでは」と感じ始めている方もいるのではと想像しています。今日の学校現場では、たとえ新規採用者であっても、それなりのレベルの指導力や保護者対応力が求められています。とりわけ、保護者の教員に対する見方にはある意味厳しいものがあると感じています。大事な我が子を預けるわけですから至極当然のことと思っています。

保護者の願いは、「我が子が、まずは安心して学校生活を送れること。次に相応の学力を育てて欲しい」ではないかと推測しています。ですから、これらの期待に応えてくれる教員は、いい教員だと評価されます。

今の保護者にとって、教員の「若さ」は魅力ではなく、どちらかと言えば「不安」要素の一つなのです。新人にとっては、つらいことですが、この傾向は今に始まったことではないと思っています。昔から、保護者間では、「今回の先生は当たりだね」等の会話がなされていました。ただ、このような内容が、担任などの耳に入らないだけです。新人の皆さんに対して随分と厳しい物言いをしましたが、私も３８年前は新卒１年目の教員でした。

私の場合、出だしの１カ月で、すでに大きな挫折を味わっていました。小学３年生の担任。２学級の学年。学年を組んだ方は、３０代半ばのベテラン教師（男）。明るくエネルギッシュで指導の肝を押さえた方でした。隣の学級は集団としてのまとまりがあり、授業も楽しそうで活気がありました。一方、私が受け持った学級は、給食の時間は騒がしく、何事においても今一つ集団としてのまとまりに欠けていました。授業も、それなりに準備をして臨むのですが、なかなか上手くいかない。日を追うごとに私は精神的に落ち込んでいきました。「目の前の子ども達の状況は、全て自分のせいだ。自分は教師に向いていると思っていたのに。なぜだ？」

５月の大型連休は、実家に帰省しましたが、気分は最悪でした。本来なら、疲れを癒しリフレッシュすべきなのに、それができない。仕事が上手くいかなくて落ち込んでいることを親（祖母）に相談できるわけがない。重い気分で勤務地に戻りました。

その後も、悩み苦しむ日々が続きました。先輩教員からは、「先生、学校で一番優しいよね」と言われました。これは、「先生、子どもをきちんと怒れないよね」を意味していました。自信をなくし、ふがいなさを感じていた私は、指導すべき機会を逃し続けていました。

状況が好転したのは、夏休み明け頃です。
保護者から「先生、今度の日曜日にお楽しみ会やったら」と提案されました。実は、保護者の皆さんは、何とか担任が明るく元気に子どもと接し、子ども達と良好な人間関係を作って欲しいと願っていました。そういう気遣いからの提案だったのです。
子ども達は、グループごとに出し物を準備していました。みんな笑顔で、楽しそうでした。「先生も何かやって」との要望に、跳び箱の技を見せました。「先生、すごい！」と言ってくれました。「こんな私を、君たちは、見捨てていない。まだ、慕ってくれている」と感じたあたりから、自分の気持ちにわずかながら変化が起きたことを覚えています。「自分を変えなければ」と思い始めました。

転機はまもなく訪れました。掃除の反省の際、学級で最も影響力のある男子児童を叱りました。何を叱ったかは忘れましたが、私の中で「これを見逃してはならない」と心が動いたことは今でも覚えています。最大限の気迫を前面に出しました。この指導で、その子との関係が悪化する可能性は十分にありましたが、「駄目なものは駄目」と伝えなければならないという一心でした。結果は吉と出ました。以後、その子は、私の話をよく聞くようになり、とても協力的になりました。彼の態度と連動して、学級の状態も良い方向に進んで行きました。後日、その子のお母さんから、「あの子、先生の怒った姿がかっこよかった」と言っていましたよと聞きました。

私の昔話が長くなりましたが、新卒１年目の皆さん、１年目から上手くやろうとか、周囲から認められたいとか、よい評価を受けたいとか、そんな望みは持たないでください。わからないことがあって当然。上手く出来なくて当然。いいふりこかない。わかったつもりはやめましょう。自分の考えを持つことは大事ですが、かたくなにこだわるのはよくありません。先輩教員や教頭先生にいっぱい質問してください。いっぱい相談してください。その上で、「これは、今の自分でも試せそうだ」と思ったことをすぐに実践しましょう。そして、その日のうちにふり返りましょう。良くても、良くなくても、その結果をアドバイスしてくれた方に報告しましょう。きっと、また良いお話を聞けますよ。

目の前の子ども達のために、背伸びをせず自分がすぐできること、少し頑張れることを見つけましょう。１年目は、失敗しても許されます。「若い」ということは、たくさん失敗し、そこからたくさん学ぶことができる期間と捉えています。